

なかへ、
降りていくと
小池昌代

を
見つめる
カズオ・イシグロ
ゴミに記憶を託す
中川僚子

小池昌代
阿部公彦
平井杏子
中川僚子
遠藤不比人
新井潤美
藤田由季美
木下卓
岩田託子
武井博美

カズオ・イシグロ

水声通信
目次
no. 26

70 カズオ・イシグロ
の
長電話
『わたしを離さないで』で気になること
阿部公彦

76 遡行
する
イシグロ
〈ジャパニーズネス〉と
〈イングリッシュネス〉のあなたに
平井杏子

98 とくに
最初
の
二楽章が……
カズオ・イシグロの
〈日本／幼年期〉をめぐって
遠藤不比人

108 カズオ・イシグロ
の
小説における
「顔のない」
語り手たち
新井潤美

116 カズオ・イシグロ
の
声をめぐって
藤田由季美

124 カズオ・イシグロ
に
おける
戦争責任
「信頼できない語り手」が
語る戦争
木下卓

134 映像に
イシグロ
は
なにを見るか
岩田託子

142 カズオ・イシグロ
書誌
武井博美〔編〕

34 白川昌生
〈ローズ・プリンセス・
プロジェクト〉のこと

43 オルフェウスの主体の行方
野村喜和夫〔著〕『オルフェウスの主題』評
吉田文憲

48 《すべての人が乞食なら》
逆ユートピアあるいはユートピア?

アルベール・コスリー〔著〕
田中良知〔訳〕
『老教授ゴハルの犯罪』評
本田康典

連載
出版史の余白に《11》
2 ニコラ・コンタ『印刷業の逸話集』を訳す〔その三〕 宮下志朗
8 ふたつの鏡《7》 松浦寿夫
12 魂のたそがれ——十九世紀末再訪のころみ《10》 湯沢英彦
ホモ・テクニクス、ホモ・ナトゥーラ《17》
19 脳、宗教、そしてサイボーグ 高橋透
Pré-texte(s) ★ロラン・バルト《12》
24 テクストからモアレへ——セミナー『恋愛のディスクール』を読む〔その二〕 桑田光平
154 記憶の感触——転落譚《25》 中村邦生

58 もっとオッパイを！
赤塚不二夫追悼余話
長谷邦夫

追悼●赤塚不二夫

長電話

今、廃れつつある文化といえば、長電話かもしれない。といっても携帯ではなく、イエ電の方である。八〇年代までは連絡といえはまず電話だった。かつて筆者の友人に長電話を得意とする人物がいて、一回かかってくるとたいいて一時間、場合によっては二〜三時間つづく。Mという人だった。「M氏は電話が得意ですねえ」と言うと、「うん、そう言われると嬉しいね」などというやり取りをした覚えがある。なんだ、本人も自覚済みだったのだ。長電話には「技」が必要である。途切れることのない話題。メリハリのなさ。下手に盛り上がって、「あゝあ、おもしろかった」などという台詞に辿りつくと、「さあ、切りましょう」の合図になつてしまうから、あくまでならだら、へらへら、ずるずるとよどみなく語り続ける。携帯ではないから移動も難しい。キャ

通して語られ、キャシーの心の有りさまを反映した、ちょっと受け身で遅れ気味の、うつつすらと鬱のかかったような視界を特徴としている。

いわゆる「意識の流れ」というほどの気まぐれさや脈絡のなさ、「詩的さ」はない。ヴァージニア・ウルフのようなぶんぶんと匂い立つような陶醉感はなく、情緒的な中にもどこかで意識が冴え冴えとしている感じがある。心の奥底の気持ち悪い部分をどろっと露わにするような暴力性、切ったり割いたり凄惨な分析の視線もない。じつにふつうなのである。乱れもなく、裂け目もない。ときおり貴重な物語の「瞬間」を訪れることもあるが、そこもまた、紋切り型と言つていいほどのスムーズさで書ききられる。キャシーのキャラクターも、尖ったりへこんだりした部分は目につかない。あくまでよどみなく語り続ける人なのである。なめらかな、切れ目がない。終わらない。長い長い電話のように。

クローン人間という、きわめて毒々しいけれど、それを心に響く言葉で語るのがたいへん難しいテーマを設定したことが、この小説の「たくらみ」の出発点にはあった。しかし、この問題が正面切つて語られるのは、ほんとうに小説の最後の数十頁だけ。イシグロはテーマを叫ぶことによつてではなく、徹底的に地面をならすことによつて、つまり、いかにテーマを飛ばすかに腐心するのではなく、いかにテーマを着地させるかにこだわることで「たくらみ」を成就しようとした。その挑戦はたしかに成功している。クローン人間の培養されるヘルシヤムという異常な世界の、そ

特集★

カズオ・イシグロ

『わたしを離さないで』で気になること

ツチホンもないから邪魔も入らない。家にじつと座つて受話器を握り、でも、途中で食べたり、飲んだりくらいはあり。テレビを見たり。場合によつては居眠りすることも。そうまでするのは、携帯とちがつて次はいつ相手がつかまるかわからないから。もちろん、ほんとに退屈だと切りたくなるから、そこそこの刺激も欲しい。で、突き合つたりする。M氏はこちらが言ったことに、「え？ そう。違ふと思うね」などといちいちからんでくるのを得意としていた。

イシグロの小説には上質の長電話のようなところがある。「わたしを離さないで」のスタイルも、よどみなさ、破綻のなさ、波乱のなさといった、「なさ」という否定形で形容したくなるような一歩退いた文章術が感じられる。物語は主人公のキャシーの目の「尋常さ」を徹底的にイシグロは描いてみせたのである。このやり方には、まるでマッチ棒だけで世界を作り上げてしまうような、熟練した匠の技が感じられる。一見、だからしてメリハリがないようにでいて、実は水も漏らさぬような持続と安定の感覚に裏打ちされた世界。でも、なぜここまでこだわるのだろう、という気もする。なぜここまで精緻に、小説世界の地面をならそうとするのか。なぜ小説の形を借りた長電話をする必要があったのだろう。

気になる箇所がひとつある。

物語の潮目がちよつと変わるところである。クローンたちのための隔離施設ヘルシヤムから、コテージと呼ばれる場所に舞台が移つた後。語り手のキャシーはひそかにトミーに思いを寄せていたが、トミーはキャシーの親友でもあるルースと付き合っている。ヘルシヤムでも恋愛沙汰はあったが、コテージに移つてからはそれがやや控えめの形をとるようになる。ルースもトミーに対し、人前でいちやつくようなことをするかわりに、あるジェスチャーを行うようになった。

どうするかというと、相手の腕の肘の辺りを手の甲で軽く叩くのです。ちよつと、後ろを向いている誰かに、こちらを向かせようとしてやるあのしぐさです。二人が別方向に向かうとする瞬間、女のほうから男にやるのが普通でした。この習慣は、冬まではしだいに廃れていきましたが、わたしたちが到着した頃に盛んに行われていて、ルースもそれをトミー

にやりはじめました。

(146) 引用は土屋政雄訳による。(以下同じ)

キャシーはルースがあらたに採用したこのジェスチャーが気に入らない。テレビドラマの物真似だからである。見ていると苛々する。それである日ついに、そんなつまらないことをやるな、とルースに忠告してしまう。「真似するような価値のないことよ」と(149)。これに対しルースは、「そんなことしてるの気づかなかつた」ととぼけ、逆にキャシーに傷つけるようなことを言う。それでもキャシーは挑発には乗らず、いかにもトミーを密かに慕う者の言葉らしく、「トミーをおもちゃにしないで」(150)と訴える。つまりここは、ルースとキャシーとトミーの三角関係が一気に顕在化する場面なのである。と同時に、キャシーとトミーとの間柄に、ルースという人物の性格がどう関わっているのかもはっきりしてくる。

先に気になると言ったのは、キャシーとルースのやり合いのきつかけである。キャシーはいきなりルースの仕草に腹を立てたわけではなかった。実はある出来事がきっかけとなって、キャシーは忠告を決意した。キャシーはそのときのことを次のように語る。

あの日の午後、わたしが草の上で「ダニエル・デロンダ」を読んでいて、ルースが邪魔をしてしかたがなかったとき、そろそろ誰かが指摘してやるべきだと思ったのでした。(147)

ばかりのルースの態度です。親切めかした押しつけがましさとでも言うのでしょうか。そんな態度の背後にある理由にも、あのときのわたしはすでに薄々気づいていたように思います。初めてコテージに来てからの数カ月間に、わたしたちはなぜか読書量で何かが計れるような気がしていました。どれだけコテージに馴染んだか。新しい環境にどれだけ適応できているか。それが、読んだ本の冊数に現れる……。(148)

『ダニエル・デロンダ』と言えば、内容および文体の重さと、長さとの兼ね合った作品である。この箇所でも「戦争と平和」と並べて語られ、「有名だけと退屈な古典」の代名詞として扱われてもいる。せっかくなのでその古典を読み始めたというのに、ルースは意地悪にも粗筋を言おうとする。それで怒った、という展開なのである。しかし、『ダニエル・デロンダ』への言及はさらにもう一回ある。

『ダニエル・デロンダ』の読書を邪魔されたのが腹に据えかねた、というのである。これだけなら単なる状況説明とも読めるのだが、このあと、さらに詳しく事の顛末が語られる箇所は以下のような具合である。

わたしが古い防水シートに腹ばいになり、申し上げたとおり『ダニエル・デロンダ』を読んでいると、そこへルースがふらりとやって来て、横にすわりました。そして、本の表紙をじろりと見て、なるほど、というふうにならずきました。待つこと約一分。恐れていたとおり、やはり始まりました。ルースが『ダニエル・デロンダ』の粗筋をとうとうと語りはじめたのです。わたしはいまのままで上々の気分です。ルースが来てくれたことも歓迎でしたのに、とたんにいらいらしはじめました。前に二度ほど同じことをされていましたが、ルースがほかの人にそれをやっているのを見えていました。

キャシーのなめらかでよどみない語り口からすると、この『ダニエル・デロンダ』へのこだわりはちょっと過剰にも見える。単なる状況説明の一環というだけでは済まない何かがある。エリオットの作品への言及には隠されているのではないかと、気がしてくるのである。

いらいらの原因は、助けてあげるから感謝しなさいと言わん

あの日、ルースが『ダニエル・デロンダ』の粗筋を語りはじめたとき——まあ、あまり面白い小説ではなく、別に楽しみを邪魔されたというわけではありませんでしたが——わたしは本を閉じ、起き直りました。いきなりで、ルースは驚いてでしょう。(149)

このあと、いよいよキャシーのルースに対する批難がはじまる、というところである。それにしても、『ダニエル・デロンダ』というタイトルがこうして幾度も言及されるのはどうしてなのだろう。

『ダニエル・デロンダ』の主要人物は、キリストの生まれ変わりのような無垢さと使命感を持ったダニエル・デロンダと、美貌ゆえにこそ悲劇に巻き込まれるグウェンドレン・ハイレズ、そしてユダヤ民族の行く末を案ずる預言者めいたモルデカイである。イストラエル建国の礎を築いた「バルフォア宣言」で有名な英国首相

タチヤナ・コトヴィチ〔著〕 桑野隆〔監訳〕

ロシア・アヴァンギャルド小百科

水声社

A5 判上製
552 頁
8000 円+税

《芸術の革命》をめざして、美術・建築・デザイン・演劇・音楽・詩等、芸術の全領域を横断しつつ激動の二十世紀を駆け抜けた前衛芸術運動の全貌を詳述する本邦初の事典。

バルフォアは、この作品に感銘を受け、実際にジョージ・エリオットと面会させている。その意味でこの作品は、二十世紀の東問題とも深くつながっているのかもしれないのだが、そうした明白な政治性や思想性とならんで、作中ではいかにも小説的な三角関係のプロットも機能しているし、最終的には、孤児とされるダニエル・デロンダの出自をめぐる謎が、劇的な展開に結びつくことにもなる。

『わたしを離さないで』では、クローン人間がノアの箱船めいた「船」に乗り込む風景が想像されたりする。クローンが、むしろ人類の生き残りを助ける世界。それは「ダニエル・デロンダ」的なルーツ探し・アイデンティティ探求がほぼ遠く無効になった世界とも見える。だからこそ、この「わたしを離さないで」の世界では「ダニエル・デロンダ」などという古典はどうしようもなく「退屈」なのだろう。しかし、にもかかわらずキャシーは「ダニエル・デロンダ」に過剰にこだわる。なぜか。

ここにはキャシーの「介護人」という役割が関係しているのではないか、というのが筆者の解釈である。介護人に課せられるのは、「提供者」(donor)が「使命を終える」(complete)まで、その世話をするという仕事である。提供者であるルースやトミーは、人間のパーツを提供しながら少しずつ死んでいく、そういう人生を——それを「人生」と呼ぶことが可能ならだが——いかにスムーズなものにするか、それが介護人の腕の見せ所なのである。

「介護人」は英語で carer、つまり元になっているのは care という語である。「心配する、気にかける」から「世話をする、看護する」、や倫理があり、そして神の影がほの見える。それに対し、「わたしを離さないで」にあるのはむしろプロットに対する強烈な拒絶反応である。むしろ作品にはプロットがあるのだが、語り手のキャシーはそのプロットを忌避する、ということなのだ。だから彼女は長電話にこだわった。

頭の良いルースは整理が得意である。鋭い目も持っている。トミーのパートナーとしてほんとうにふさわしいのが、自分ではなくキャシーであることも見抜いていた。そういうルースは、「ダニエル・デロンダ」を粗筋で語ってしまうことで、キャシーの介護人としての持続の語りをも台無しにしようとするのである。だからこそ、キャシーは怒った。死ぬことが決まっている存在に向かって、粗筋を語ってどうするのだろうか。整理して、地図を書いて、どうなるのか。生きている今を語るしかないではないか。care とはそういうことなのではないか。

長電話のしつこさや鬱陶しさには、寂しさや孤独から救われたい

さらには「愛する、好む、欲する」といった語義を持つこの語は、キャシーの語り口にそのまま反映されている。土屋政雄訳がその口調をですます調で訳しているのはまったく適切で、キャシーのなめらかな語り口にこめられたやさしさや誠実さだけでなく、そのくどさや執拗さ、鈍感さ、じれったさなども含めて、たいへんうまく訳出していると思う。

キャシーという人物とその語りを象徴する care という語は、実は「ダニエル・デロンダ」のキーワードでもある。この長大な古典に登場する人物たちのこだわり、使命感、愛憎、そして何よりも執拗で重たなエリオットの語り口には、care という語から発する温度感がはつきりと読める。それはエリオットの作品にいつもある鬱陶しいほどの「温み」に通ずるものであり、登場人物や、場合によっては読者に対して独特の執拗さを発揮するその文体の特性をよく表すものだ。

キャシーもまた執拗で「温み」に満ちた、care の語り口で語る人なのである。それは「使命を終える」ことを義務づけられたクローンと接する介護人としての仕事が必要とする語り口なのである。とにかく持続させること。相手が生きている間は、ひたすら、生きることを手伝えること。切れ目を作らず、先のことには触れず、振り返らず、「今」を語りつづけること。まさに電話を切らないためにこそつづける長電話のような語りなのである。

しかし、「ダニエル・デロンダ」を読んでそれを「長電話」と形容する人はいないだろう。「ダニエル・デロンダ」はやはりプロットで書かれた小説なのである。そこにはロジックがあり、意思

という願いがこめられている。care の語りとはそういうものなのだろう。 57

註

* 11 このあたりの事情については、最近では「タイムズ文芸付録」二〇〇八年五月九日号でケネス・M・ニュートンが触れている。

文献

Kazuo Ishiguro, *Never Let Me Go* (New York: Knopf, 2005).

カズオ・イシグロ、土屋政雄訳「わたしを離さないで」(早川書房

1000x).

Newton, Kenneth. M., "Community," *Times Literary Supplement*, May 9, 2008.

マレク・ハルトフ〔著〕 吉田はるみ十渡辺克義訳〔訳〕

キエシロフスキ映画の全貌

ポーランド時代のドキュメンタリーから『デカロク』『ふたりのペロニカ』『トリコロール』三部作まで、全作品を読み解く初の本格的評伝作品論。

水声社

A5 判上製
320 頁
3000 円+税